



「親鸞聖人七百五十回大遠忌についてのご消息」をいただいて

中西 智海 (なかにし ちかい)

ご消息は、まず平成二十四年一月十六日がまさに宗祖親鸞聖人七百五十回忌の日であるとされ、本願寺ではその大遠忌法要が平成二十三年四月よりお勤めになることを示されました。それについて次に、

このご勝縁に、聖人のご苦勞をしのび、お徳を讃えるとともに、浄土真宗の教えを深く受けとめ、混迷の時代を導く灯火として、広く伝わるよう努めたいと思います。

という、いわば決意表明を述べられました。

ここで、私は、はたと立ち止まらせていただきました。それは「混迷の時代を導く灯火として、広く伝わるよう努めたい」というお言葉であります。

「伝えてやる」と「伝わる」は全くその姿勢が違ふといわねばなりません。「伝える」というのは、自分は正しい教え、伝道はすべてわかっている、それをわからない人、知らない人に伝えてやる、あるいは知らせてやるという文勢になります。そうすると、伝えてやると力めば力むほど、伝わらない事実が明らかになるということがあります。

それに対して「伝わるよう努めたい」とのお言葉は、自分の方がすべて知り尽くし、正義であって、それを相手に教えてやる、伝えてやるというレベルではありません。そこには混迷の時代に生きるものの問いの立場に立って、お互いに確かめあい、育ちあいという姿勢があらわれているということでもあります。

かなり前のことですが、「現代人をどうみるか」という話し合いの機会がありました。そのとき、現代人は宗教に無関心であるとか、いや、反宗教であるとかいう言葉も聞かれたことでもありました。私はそのとき「現代人は答えとしての宗教性は希薄であろう。しかし問いとしての宗教性は極めて豊かである」と発言しました。そうすると、その問いとしての宗教性とは何か、その内容は、というおたずねがありました。そこで、問いとしての宗教性とは、すべてのものは、苦痛と苦悩をいただいているということであるといいました。

ですから、悩み、すなわち問いの中に身をおいて、生きる姿勢を話しあい、確かめてゆくというのが、伝わるということの基本であると思うことでもあります。私はこのご消息のお言葉が、教団・伝道にかかわる一人ひとりの人生への姿勢を示してくださったお言葉であると領解させていただきました。

ご消息はこのお言葉の次に親鸞聖人のご一生を記され、そして聖人によって開かれた浄土真宗の教えの要を適正に示されました。

次に、

仏教の説く縁起の道理が示すように、地球上のあらゆる生物非生物は密接に繋がりを持っていますとのお言葉を述べておられます。

ここで、また私は立ち止まらせていただきました。私のいのちは「生物非生物と密接に繋がりを持っています」

というところであります。私たちは、仏教、特に大乘いっさいしゅじょう仏教は一切衆生を仏に成らせる教えであると教わり、十方衆生をわかりやすく「生きとし生けるもの」と現代語訳として一般化しているとさえ思われます。しかし「生きとし生けるもの」とは生物のことだとすると非生物は入らないことになってしまいます。これに対してご消息のお言葉は、はっきり生物非生物が私のいのちに密接に繋がっていると示されているのであります。

この非生物というお言葉で、かつて聞かせていただいたことを思い出しました。

念仏をよろこんだ妙みょうこうにん 好人といわれた人が、つまずいた石ころに手を合わせて「ご催促さいそく じゃ、ご催促 じゃ」

といったこのことです。石は邪魔になったら蹴飛ばせというのとは全く違います。非生物の石が、自らのめざめをよびさます導き手であり、友であるというところであります。

ところで、その生物非生物と深い縁をもっていることにめざめよという意趣は、ご消息の次のお言葉に連動するものであります。すなわち、

ところが今日では、人間中心の考えがいよいよ強まり、一部の人びとの利益追求が極端なまでに拡大され、世界的な格差を生じ、

とのお示しであり、さらに、

争いの原因が人間の自己中心性にある

とおさえられているお言葉であります。このように、今日の世界的格差の問題の根も、戦争、争いの原因も、人間の自己中心性にあること、この思想を変革する基本に、いのちがあらゆる生物非生物と密接に繋がっていることにめざめることであるというお示しであります。

そして終わりに近いところに、

広く浄土真宗が伝わるよう取り組むことになっています。

と述べられています。

私たちはこのご消息のおこころを深く受けとめて、御同朋・御同行おんどうほう おんどうぎょうとして念仏生活をいとなみ、報謝の行動をおこすことを誓いあいたいものであります。

(勧学)